
ふたりピース

愛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりピース

【Nコード】

N1040V

【作者名】

愛莉

【あらすじ】

ごく普通の高校生・祐樹の前に現れた、謎の妖精・リーナ。リーナの姿は祐樹以外の人間には見えず、混乱の共同生活(?)が始まる！【ファンタジー】

手が土まみれだ。マジついてねえなあ……。何で草むしりなんかやらなきゃなんねーんだよ。オレンジ色の夕日がやけに綺麗で、孤独に草むしりしてる自分が虚しくなった俺は、繰り返し溜め息をついていた。

皆が部活しているグラウンドを背に、俺はフェンスの傍で草むしりをしている。いや、させられている。左手でサッカーボールを弄びながら、右手で適当に草をプチプチと抜いていった。抜いた草は小さな山となって、足元でクタツとしている。

今日、部活が始まる前のことだ。部室で着替えようとしてることに、クラスメイトであり部活仲間でもある健太が来た。

「なあ祐樹。俺、今月の小遣い使いすぎちゃってさあ」

「今日はジュース、奢らねえぞ」

「チツ。いいじゃねえかよー」

健太は俺が着ようとしていたシャツを手にして振り回した。

「それ着るんだから。返せって」

「やだ。喉、渴いてんだよ」

「じゃあ水でも飲んでろっての」

じゃれながら健太とシャツを奪い合っていると、急にガラツと部室のドアが開いた。

「お前ら、何やってんだ！」

突然のことにビックリしてよろめき、俺は入ってきた顧問にぶつかった。その衝撃で顧問もよろめき、ドアに身体をぶつけた。

「ヤバい」

そう呟いたのと同時に、顧問から罵声が飛んだ。

部活に少し遅れていたということ、ふざけてたせいで顧問がドアに身体をぶつけたこと。俺たちは顧問の怒りを買って、ペナルティを受けることになる。はずだったのに。

「祐樹、お前一人でやってくるんだ」

「え？ 何で俺だけ？」

「健太は宿題未提出で、担任の先生から呼び出しがかかってる」

顧問はそれを伝えるに、部室まで来たらしい。なんて運のいいヤツ……（この場合、いいと言いつのか？）。健太はニヤニヤした顔を向けて校舎の方へ去っていき、俺は仕方なく指定されたグラウンドの隅っこで草むしりを始めた。そして今に至る。

もうすぐ部活が終わる時間だ。クソツ、健太のヤツ。ニヤニヤしゃがって。こんなことをするハメになったのも、全部お前のせいでっつーの。後で嫌味メール送ってやる。

『うーん……うーん……』

ん？ 何の音だ？ 軽く見渡しても、近くには何も無い。気のせいかな？

『うーん……うーん……』

やっぱり聞こえる。何だ、この音。フェンスの方から……？

立ち上がり、フェンスの前に歩み寄った。変な音は、まだ聞こえている。何だか足元から聞こえているような気がして、その場に

やがみ込んだ。フェンスの下には側溝がある。その辺りから聞こえているような。

「何だ？ コレ」

見ると、ヒビが入って割れた側溝のフタの隙間に、人形が挟まっていた。バービー人形を小さくしたような、女の子の人形。音の出所はコイツか。唸り声みたいな音を出してるってことは、壊れてんのかも。

「っーか今時の人形って、こんなふうに出るんだ。進化してんなあ。ま、女の子の人形なんか興味もないし　と思って立ち上がろうとしたとき、人形の顔がグルツとこっちを向いた。」

「もしかして君、私が見えるの！？」

「うわああっ！」

思わず尻もちをついてしまった。

「やっぱり！　挟まって動けないの。お願い、ここから出して！」

人形が喋ってる！？　一体、何なんだ！？　パニクりながらも、俺は人形を見た。お願いの眼差しが、俺に向けられている。もしかして幽霊？　お化け人形？　何がどうなってるんだ？　もしかして俺……ここで言う通りにしないと、呪い殺される系？

こんな得体の知れないモノに呪い殺されても困る。俺は意を決し、人形に手を伸ばした。俺の指ほどしかない手が、そっと触れる。っ、冷たい。コレはマジでヤバイんじゃない……。

「小さな手を軽く引つ張ると、人形はスポツと隙間から抜けた。ありがとう。君のおかげで助かった」

俺の手から離れ、人形は宙に浮いた。「冗談だろ、おい……」。

「あ、あ、あのっ。君は『何』？」

『何って、失礼ね。君たち人間とは違うけど、ちゃんとした名前があるのよ。私は』

人形が言いかけた瞬間、後ろから「祐樹くんっ」という声が出た。振り返るとサッカー部マネージャーの真理子ちゃんが立っていて、地面に手をついてる俺を見下ろしていた。慌てて立ち上がる。

「草むしり、お疲れ様」

真理子ちゃんはクラスメイトであり、我が部のアイドル的存在でもあり、何と言っても俺の気になる存在である。めっちゃ可愛い。その笑顔でどんなに癒されてることか……って、んなこと今はどうでもいい。

「真理子ちゃん！ ちょっと見てよ、コレ！」

俺はお化け人形を指差した。人形はきよとした顔で、俺たちを見上げている。

「『コレ』？ 何もないけど……」
は？

「祐樹くん、どうかしたの？ 草むしりで疲れちゃった？」

「いやっ、だからココに」

言いかけた瞬間、お化け人形が喋った。

『彼女には私が見えないのよ』
何だって！？

「それよりね、先生が『もう終われ』だって」

いつの間にか、グラウンドでは皆が後片付けを始めていた。

「先生には私から伝えておくから。祐樹くんはそのまま帰っていいよ」

「あ、うん……」

可愛い笑顔を向けられ、ついへたと間抜けな笑みを浮かべてしまった。

「あと」

歩き出した真理子ちゃんは、顔だけ俺に向けた。

「帰りは気を付けなきゃダメだよ？ 何か『様子へん』みたいだし」
「そう言い残した真理子ちゃんの背中へ、あつという間に遠ざかっていった。」

真理子ちゃんの姿を最後まで見送りながら、俺は呆然とした。何てこった……。間違いなく「おかしいヤツ」呼ばわりされてた。最悪すぎる。それも全部、コイツのせいだ。俺はしゃがみ込むとお化け人形を睨みつけた。

「あ、「邪魔」が入ったね。私はリーナ。光の都の妖精ですっ」
無邪気にピースしてるお化け人形を前に、手が土まみれだったことを忘れて頭を掻きむしった。

「お前は何なんだよ！ 何で宙に浮いてんの？ 何で真理子ちゃんには見えないの？ 光の都？ 妖精？ 何だソレ！ しかも「邪魔」なのは真理子ちゃんじゃなくお前だあ！」

荒くなった呼吸を整えようと、俺は深い息を吐いた。

「もう、そんないっぺんに訊かないでよ」
ムツと口を尖らせた人形は、チラツとグラウンドに目をやった。

「祐樹クンだっけ？ さっきも言ったけど、祐樹クン以外の人に私の姿は見えないの。だからココで話していると、祐樹クンは一人で喋ってるオカシイ人に思われちゃうと思う」

コイツ……当り前のように言いやがって。

「だから人に見られないトコで話すわ。それに 私自身、驚いてるから」

人に見られないところと言われても、自分の部屋くらいしか思いつかない。仕方なく、この妙な人形を連れて帰ることにした。人形はニコツと笑うと、勝手に制服のポケットに入った。

何がどうなってるのか、とにかく頭がパンクしそうだった。早いトコ話を聞いてやって、成仏してもらわないと。あ、でも妖精とか言ってたな。成仏とは違うか。ダメだ、頭が混乱する。訳の分からない事態に、頭の中で変な妄想をグルグルさせながら、俺は必死でチャリを漕ぎ続けた。

+++++

帰宅後キッチンに入ると、母さんの背中に「メシは部屋で食う」と声をかけ、用意されていた食事をお盆に乗せていった。

「またゲームの通信プレイってやつ、するの？」

「健太と約束してんだ」

「ちゃんと宿題もするのよ。今年で受験生になったってこと、忘れちゃダメだからね。大学受験っていうのは……」

母さんの言葉に適当に頷きながら、俺は二階の部屋へと急いだ。ボタンとドアを閉め、お盆をテーブルに置くと、ポケットから人形が出てきた。何だか妙に疲れた気がして、俺はベッドに寝転んだ。人形は俺の頭上に浮いて、ピンク色のワンピースの裾をパタパタとはたいている。

『ポケットの中、汚ないよ。スカートがホコリまみれになっちゃった』

「悪かったな。大体、飛べるんなら飛んで来ればいいだろ」

『嫌よ。自転車って速いから、追いつくの疲れるし』

人形はベッド横のチェストの端に座った。

『さつき溝に挟まってたのだったって、飛んできたサッカーボールに当たったからなんだもん。避けようとしたけど、速いから間に合わなくて。人は見えてないから当たらないけど、物には触れることができるから。こういうとき大変なの』

サッカーボールってことは、ウチの部のヤツか。

「で？ 結局、君は何なわけ？」

『うーん、どこから説明したものが……。っていつか、また私のこと「何」って言ったでしょ』

咄嗟に「ごめん」と言い、俺は上半身を起こして人形の顔を見た。人形は綺麗な白い肌で、少女マンガのようにキラキラした目をしている。髪は腰ほどまである金髪ストレートで、女の子が喜びそうな人形そのものって感じた。

『さつき「光の都」って言ったでしょ？ それは私の住んでる世界なの。簡単に言えば、妖精の住む世界。私と同じような身体の妖精たちが、この人間界と同じように生きているわ』

急にそんなことを言われても、全くイメージが湧いてこない。でも、人間界とは別で妖精界というものがある……。取りあえず、そういうことにしておこう。

『私たち光の都とは逆に、闇の都というものも存在しているわ。光の都、闇の都。どっちも妖精の住む世界だけど、「仕事」が違うの』

そこで俺は話を止めた。

「長くなりそうだし、メシ食いながら聞くわ」
俺はベッドを下りて、テーブルの前に座った。ありえない事態に興奮してたけど、微妙に落ち着いた今、思い出したように腹が減ってきたんだ。

『じゃあ私も、ご飯にしよう』

ふわふわと宙を移動し、人形はテーブルの隅に立った。

「お前、人形のくせにメシ食うの？」

『人形じゃない！妖精だって言ってるでしょ』

怒られた。どう見ても人形なのに……。まあさつきと同じく、コイツは妖精だということにしておこう。

「お前、メシなんか持ってんの？」

『ない。祐樹クンのご飯、ちよつと分けて』

「は？」

何で俺の周りには、俺のモノをもらおうってヤツが多いんだ……。

『いいじゃない。ホラ、私、身体が小さいから。そんなに食べないし』

確かにこの身体の大きさなら、俺にとっての一口でも結構な量だろう。俺はおかずの唐揚げを一つ、皿のふちに置いてやった。

『こんな大きいのを一つ置かれても、食べにくいじゃない。もっと小さく切り分けて』

「んだよ、人のおかず盗ったときながら、贅沢なこと言いやがって」
ブツブツ言いながらも、俺は唐揚げを箸で細かく切ってやった。

『これでもちよつと大きいけど、まあいっか。いただきます』
テーブルの上で人形　　じゃなく妖精が、俺の唐揚げを食ってる。

何だ、この珍妙な光景は……。唐揚げをムシヤムシヤしてる妖精を
見ながら、俺も白メシを頬張った。

「つーか、妖精って唐揚げ食うんだ。何か『妖精』って感じじゃねえな……」

『ううん、初めて食べた。美味しいわね』

「じゃあいつもはどんなモン食ってんの？」

『光の都には、たくさん種類の木があつてね。その木になつてる実を食べてるの』

うーん。要するにリスみたいなモンなのかな……。

『人間界のご飯、興味あつたのよね。予想通り、とっても美味しい。美味そうに食べてるところ申し訳ないけど、まだ話は終わってない。唐揚げを飲み込んでニコニコしてる妖精に、俺は話の続きを促した。』

『光の都の妖精は、人間界に幸せをもたらすのが仕事。闇の都の妖精は、人間界に不幸をもたらすのが仕事。年齢性別も様々だし、役職とか階級とかもあるけど、妖精界の全員が必ず持っている使命がそれなのよ』

マジで？ それがホントのことなら、この妖精は人間を幸せにできるとしてこと？

『簡単に言えば、そういうことになるわ』

「じゃあ俺を幸せにしてくれよ。最近、ツイてないことが多くてさあ」

妖精は首を横に振って『無理よ』と言った。

『妖精の力はやたらと使えるものじゃないし、自分自身のために使

うこともできないわ。しかも個々に担当する人間が決まってるの。担当じゃない人間に対して幸せを注いでしまったら、それは罪になるんだ。ある妖精が幸せにする担当の人間を、別の妖精が幸せにすることは、人のものを横取りすることと同じになってしまうの。人間界で言う「万引き」みたいなものかしら」

なんかいろいろ事情はあるみたいだけど……。つまり俺たち人間は、妖精によって幸せになれたり、不幸になったりするってこと？ だったらどんなに頑張ろうと不幸になるときはなるし、心が荒んでるときでも幸せなことが起きるときは起きる？ そんなのアリかよ……。

「うーん、じゃあさ。俺の担当をしてる妖精に、『祐樹にもっと幸せを与えてください』って伝言してよ。それならいいだろ？」
『それも無理ね』

何だよ、もう。せっかく幸せになれるチャンスが目の前にあるってのに。少しくらい人の願いを聞いてくれたっていいじゃねーか。

『担当の人間は、当人にしか分からないから。祐樹クンの担当が誰かなんて、知ることできないもん』
「知り合いの妖精に、片っ端から聞けば？」
『教えられないのよ。何て言うのかな。……そう、担当の人間が脳に直接インプットされるみたいな感じ？ 自分自身には分かってても、他人に明確なイメージを伝えることはできないのよね』

分かるような、分からないような。変に中途半端な情報しか得られず、俺の頭の中は余計に混乱するハメになった。でも妖精の言ってることが事実だとして、だとしたら適当に生きようと頑張ってる生

きよつと、大差はないってことになる気がする。

メシを食べ終えた俺は、またベッドに寝転んだ。

『ねえ。さっきの人、お母さんでしょ？ 勉強しなさいって言うってたじゃない。いいの？』

「だって、頑張ったってどうせ闇の都の妖精に不幸を与えられると
きがるんだろ？ 頑張るだけ無駄な気がして」

すると妖精は、溜め息をつきながら枕元まで飛んできた。

『あのねえ……。妖精が人間に与える影響は、その人次第で決まってくるの。今の祐樹くんみたいに適当にしか生きようとしなければ、担当の妖精は弱ってしまう。逆に闇の都で祐樹くんを担当してる妖精は、今頃ハツラツとしてると思うわ』

マジかよ。じゃあ結局、頑張らなきゃダメってことか……。あーあ、何か聞きたくないことを聞いちゃったなあ。そこで俺は、ある重大なことに気が付いた。

「普通に忘れてたんだけど。何で俺には妖精が見えるんだ？」

俺は身体を横にし、枕の傍で正座してる妖精を見た。

『それが、私にも全く分からないの。まさか人間界に、妖精の姿が見える人がいるなんて。予想外だったけど、私にとっては好都合でもある』

十七年間生きてきたけど、妖精の姿を見たことなんて一度もない。少なくとも物心がついてからは。にしても、好都合って一体……。

『だってこうして話し相手ができたり、ご飯をもらうこともできる

し』

「……お前、話が済んだら光の都に帰るんじゃないの？」

『帰らないよ？』

「は？ 帰らないって、どういうことだよ。まさかこのまま、俺にくっついてる気じゃ……。」

『これからもよろしくね、祐樹くん』

「いや、よろしくって言われても。まさか、このまま俺にくっついてくるつもり？」

『大丈夫、祐樹クンのプライベート全部を奪うようなことはしないから。寝場所と、ご飯と、時々の話し相手。それだけで十分だよ』
ふざけんなっつーの。なんて凶々しい妖精だ。

『何もかも邪魔しようなんて思っていないから。それに、タダで寝場所とご飯をもらおうなんて思ってないよ』

「それ、どういう意味？」

『ここにいる間、祐樹クンが私の希望を叶えてくれるなら……。お別れするとき、祐樹クンのお願いを一つだけ聞いてあげる』

つまりそれって、俺の希望を一つ叶えてくれるってことか？

「でもさっき、担当じゃないのに幸せにすることは罪になるって言うってたけど。大丈夫なわけ？」

『確かに罪にはなるけど……。こういう場合の処罰は　まあ、そんなに大きなものじゃないから平気』

うーん……。内容はよく分からないけど、本人が言いってうならしいだろう。という結論に落ち着いた。

「願いつて、どんなんでも聞いてくれるの？」

『何でも叶えられるわけじゃないわよ。妖精は「日常の些細な幸せ」を運ぶ存在であつて、魔法使いじゃないから。例えば子供の頃に戻りたいとか、未来を見に行きたいとか、そういう無茶なことはダメね』

俺は天井を見上げながら、何か願い事はないかと考えを巡らせた。せつかくのチャンスなんだから、お金で買えるようなものじゃない方がいいよな。そこでふと、さつき真理子ちゃんに変な目で見られたことを思い出した。

「じゃあさ、真理子ちゃんと付き合えるようにしてよ。真理子ちゃんのこと前から気になってただけど、高嶺の花って感じでさ。俺みたいな普通のヤツじゃ、とても恋愛に発展するなんて無理なんだよね」

俺は溜め息をついた。

『その真理子ちゃんって子、祐樹クンのことが好きなの？』

「んなわけないだろ。つーか、真理子ちゃんが俺のことを好きなら、わざわざこんなこと頼まないって」

正座してるのに疲れたのか、妖精は足を前に投げ出した。

『じゃあ無理。人の心を動かすことはできないわ』

「何だよ、それ。だったら、どんなことなら叶えられるわけ？」

『そつねえ……』

興味津々で、妖精の目を凝視する。

「お兄ちゃん！」

「おわっ!?!」

驚いて、変な声が出てしまった。ドアをノックする音、そして妹・由佳の声。俺はベッドから起き上がり、慌ててドアに向かった。

「な、何だよ」

「ちよつと借りたいCDがあるんだけど」

由佳はずかずかと俺の部屋に入ってきた。俺は仕方なく、ドアを閉めて中に戻った。

「お兄ちゃん、電話してたんでしょ」

俺の声だけが、何となく外に漏れてたんだろう。妖精の声は聞こえないはずだし。

「もしかして、コレ？」

由佳は小指を立てながら、ニタツと歯を見せて笑っている。小学六年生のくせに、どこでそんな表現の仕方を覚えてきたんだ。マセガキめ。でもまあ、電話と勘違いしてくれる方が安心だ。

本棚に置いてあるCDケースを勝手に開け始めた由佳の後ろで、俺は妖精の様子を伺った。相変わらず枕元で、足を前に出して座っている。大人しくしている妖精の目は、由佳の背中に向けられていた。

「な、なあ由佳」

「なあに？」

「あのさ、変なこと訊くんだけど……」

「変なことなら訊かないで」

そう切り返された瞬間、妖精が『あははっ』とでかい声で笑った。

「笑うなよ！」

俺はベッドの妖精に向かって言ったけど、由佳はCDケースを開いたまま、不思議そうに振り返った。

「私、笑ってなんかないけど」

妖精の声は由佳に聞こえてない、そんな当り前のことをつい忘れてしまう。妖精は『ゴメンネ』と顔の前で両手を合わせていた。

「ごめん。やっぱりいいや」

「何？ 気になるんだけどお」

「……じゃあやっぱり訊くけど、由佳、妖精を見たことってある？」
訊いた途端、由佳は「は？」と眉をひそめた。

「妖精って、マンガとかに出てくるヤツ？」

頷くと、由佳は変なモノを見るような目をした。

「そんなの現実にいるわけないでしょ。お兄ちゃん、そんなメルヘンな頭してる人だっけ？」

「うるせーよ」

「あーあ、聞いて損しちゃった。もっと面白いことかと思ったのに」

俺に妖精が見えるのなら、妹である由佳にも見えたことがあるかもしれない。ふとそう思ったけど、由佳には見えたことがないらしい。俺こそ訊いて損した。憧れの真理子ちゃんだけでなく、六つも年下の妹にまで変なヤツ扱いされて。

由佳はCDケースを閉じると、「これごと借りてっついていい？」と訊いてきた。CDのことなんか、今はどうでもいい。適当に頷くと、由佳は「ありがとお」と笑顔で部屋を出て行った。

『やっぱり、祐樹クンにしか見えないみたいだね』

「だな……」

溜め息をつきながら、俺はベッドの脇に腰かけた。

「マジ、何でこんなことになったんだろ。俺、何かしたかなあ」

すると妖精は口を尖らせた。

『私のこと、疫病神みたいに言わないでよ』

「別にそんなことはないけどさあ……………」

『それならいいけど……………。取りあえず、疲れたから今日はここで寝かせて。後のことは明日になってから考えるよ』

強引に話を打ち切られた感があるけど……………まあ、疲れてるところを無理に話させるのも可哀想だし、仕方ないか。

妖精は布団代わりにするからと、タオルを貸してくれと言った。言われた通りタオルを二枚用意して、それを勉強机の空いたスペースに並べる。妖精は『じゃ、おやすみなさい』とタオルにもぐりこんでしまった。

こんなことが現実起こるなんて……………。実際、まだ受け入れられない気持ちの方が大きかった。一晩寝たら、それは夢だったみたいだな。そんなふうであってくれ。頼みます、神様。マジで、ホントに。

俺の祈りも虚しく、翌朝も机に敷かれたタオルの中で、妖精は眠っていた。スースーと寝息まで立てている。にしても、寝たのが昨日の夜九時前で、今朝七時過ぎても起きてないって……。妖精つて、めっちゃ寝る生き物なんだろうか。気持ち良さそうに寝ている妖精を残し、俺は家を出た。

「おはよ、祐樹」

教室に入って席に着いたとき、健太が眠そうな顔をしてやってきた。　　「そういや昨日、コイツのせいで草むしりするハメになったんだった。妖精のせいで、すっかり忘れてた。」

「お前なあ、ずるいぞ。一人だけ逃げやがって」

「何が？」

「草むしり。誰のせいだと思ってんだよ」

健太は俺の机に寄りかかりながら、バツの悪そうな顔をした。

「まあまあ。今度は俺がジューズ奢るからさ」

「とか言って、どうせすぐ俺にたかろうとするんだろ」

健太は「バレた？」と誤魔化すような笑いを浮かべた。

「そついや昨日、部活の片付けが終わってから真理子ちゃんに話しかけられたんだけど、『祐樹くん、何かあったのかな？』って言うてた。様子が変だったとか何とか」

「げっ、マジ？」

「やっぱりなあ……」と思いつつ溜め息をつく。

「何があつたんだよ」

「お前には絶対に言いたくない」

その言い方が余計に気にさせたのか、健太は「教える」を連呼した。健太は俺が眞理子ちゃんに気があることを知ってるから、何か進展があつたとも思ってるんだろつ。

教えるコールを適当にやり過ごしていると、先生が入ってきた。かつたるい話を終え、そのまま一時間目の授業へと入る。今日の一時間目は担任の授業、英語だ。

俺は英語が嫌いだからすぐ眠くなってきちゃって、いつもあまり授業を聞いてない。一番前の席だけど、窓際だからそんなに目立たないし、あまり当てられることもなかった。

窓から体育の授業でサッカーをしてる人たちが見える。昨日は部活ができなかったから、今日はいつも以上に張り切つてやるつ、と思つた瞬間。

「うわあぁっ！」

ガタツと椅子が鳴る。教室みんなの視線が、一斉に俺に向いた。急に窓枠の下から、妖精がピュツと顔を出したんだ。

「どうしたんだ、大きい声出して。外に何かあつたのか？」

先生が覗むように俺を見た。ずっと窓の外を見てたこと、バレてるっぽい。

「あの、その……。ちよつと暑いんで、窓を開けてもいいですか？」

「じゃあそれを英語で言つてみなさい」

「え？ えーつと……。オープン、ザ、ウインドウ……」

「それじゃ命令形だろう。先生に窓を開けろってか？」
教室に笑いが起こる。俺は恥ずかしくなって、取りあえず「すみません」と言った。

先生が正解を言ったあとで窓を開けると、妖精がスツと中に入ってきて、俺の机の隅に立った。「何やってんだよ！」と怒鳴りたい気持ちをグツとこらえ、妖精を睨みつける。すると声を出せない俺の気持ちを悟ったのか、妖精は『ゴメンネ』と言って、机に広げていたノートを指差した。

『そこに言いたいことを書いて。そしたら会話できるでしょ？』
妖精のくせに、ちゃんと人間の書く字が分かるのか。ま、その方がありがたいけど。俺はノートの端っこに『お前のせいで笑い者になったじゃねーか』と書き、最後に怒りマークを付けた。

『私、平仮名しか分からないの』
だったら先に言えよ、という気持ちを自力に込めながら、仕方なく平仮名だけで書き直す。

『ごめんね。光の都で人間界のことは勉強するんだけど、文字を読まなきゃいけないときなんてまずないから、平仮名だけ最低限の知識として教わるのよね』

んなこと聞いてないっつーの。心の中で突っ込みを入れながら、さらに『なんでここにきたんだよ』と書き加える。

『窓の鍵を開けようとしたんだけど、どうにも重くて開かなくて。そしたら祐樹クンのお母さんが部屋に入ってきて、窓を開けてくれたの。換気しに来たみたい。窓が開かなかったら、祐樹クンが帰ってくるまであそこで待ちぼうけだったし。ちよつど良かったよ』

コイツ……。質問に答える気あるのか？ 声が出せないのがもどかしい。俺は催促するため、書いた文章をシャーペンでコツコツ叩いた。

『祐樹クンの傍なら安心じゃない。ホラ、何か危険があってもポケットに隠れられるし』

っーか、これだけの声で喋っているというのに、誰にも聞こえてないということが信じられない。マジですごいことになってるなあ……。と、他人事のように思ってしまった。でも今は、あまり喋られると困る。さっきみたいに、つい声を出してしまうかもしれないし。

俺は『じゅぎょうちゅうはしゃべらないこと。できないなら、ここからでていけ』と書き、黒板に目を向けた。いつの間にか、黒板に書かれた英文が増えている。

普段は寝てばかりで取らない英語のノートに、ひたすら英文を書き写していった。机の隅に座って黙っている妖精が気になって、何でもいから他のことに集中しなくちゃと思ったんだ。

にしてもコイツ、今日も俺にくつついてる気か？ 昨日『プライベートを全部奪うことはしない』って言ってたくせに……。これじや監視役みたいなもんじゃねーか。俺は黒板に向かう先生の後姿を見ながら、小さく溜め息をついた。

予想通り、妖精は一日ずっと俺にくっついてた。さすがにトイレに行くときは『外で待ってる』と離れたものの、それ以外は常にポケットに入るか机に座るかして一緒だったんだ。

授業中に寝そうになると起こそうとして喋り出すし、休み時間に友達と喋ってると一緒に急になつて笑いだしたりするから、こつちがビビるし……。ずっと見られてる感と見えてるのに喋れない苦痛から、一日の授業を終えた頃には尋常じゃない疲れに侵されていた。

「祐樹、大丈夫かよ。顔色、悪いぞ？」

バッグを肩に掛けながら寄って来た健太に、俺は「うーん」と気のない返事しか返せなかった。

「実は昨日、臨時収入があったんだよ。ジュース、おごつたるか？」
「いいわ……」

「……こりゃ重症だな。今日は顧問も来ないらしいし、部活やめといたら？」

健太の言葉に、俺の胸ポケットに入っていた妖精が顔を出した。

『私も休んだ方がいいと思うよ。なんかホントに疲れてるみたいだし』

心配してくれるのはありがたいけど、疲れの原因はお前なんだよ。そう思っても口に出せないイライラ。やっぱり部活は休んで帰るところにした。

力なくチャリを漕ぎながら家に帰った俺だったけど、部屋に入った途端「だあああつ！」と大声を出してしまった。

「声を出せないのがこんなに苦痛だったなんて……。お前のせいだぞ！」

呑気そうにポケットから出てきた妖精に、精一杯の睨みをきかせて言い放った。

「それを言うなら私だって。ずっと無視されてるような気がしたもの。お互い様よ」

そもそもお前がいなかったら、こんな思いしなくて済んだっつーの。俺はそんなことを思いながら、ベッドに倒れこんだ。枕に顔を押し付けて、「あーっ！」と無駄にでかい声を出してみる。ちよっとは気持ちが悪く落ちて着いてきた。

「これから毎日こんなのが続くのかよ……。俺、死なないかな」

「大丈夫。こんなことで死んだら、命がいくつあっても足りないじゃない」

「そっという問題じゃねーよ！ 昨日お前、俺のプライベートを邪魔しないっつったろ」

顔を上げると、妖精は浮かんで窓の外を眺めていた。その目が俺に向く。

『お前お前って、昨日から失礼ね。私の名前はリーナって言ったでしょ？』

「そんなの初めて聞いた」

『呆れた……。昨日、ちゃんと言ったのに』

「あーそうですか」

気のない返事をする、妖精は怒って枕元に下りてきた。

『これからはちゃんとリーナって呼んでよね』

「はいはい分かりました、リーナさん」

あくび混じりに答えると、妖精　リーナはムツと口を尖らせた。

「大体お前、自分の世界があるのに、何で人間界なんかにいるんだよ」

『またお前って言った!』

「ついだよ、つい。で、リーナ。何で人間界にいるわけ?」

『……それは言えない』

リーナは急に目を伏せた。何となく寂しそうな顔をしているようにも見える。そんな表情を見たのは初めてで、訊いてはいけないことを訊いてしまった気がした。

「人間には話せない決まりみたいなモノ?」

『そうなの。ごめんね』

「いや、いいけど……」

何だか妙な空気が俺たちの間に流れた。その空気を壊すべく、俺は「そうだ」と上半身を起こした。

「昨日の夕飯から、何も食ってないだろ? お菓子でも食う?」

『いいの? 食べたい』

目を輝かせたリーナに、得意げに「任せとけ」と答えて部屋を出る。居間の戸棚に入っているお菓子を持ち、リーナのもとに戻った。

「ほら、ポテチ。めっちゃ美味いから、食ってみなよ」

テーブルの前に座って袋を開けると、うすしお味のポテチを一枚、飛んできたリーナに差し出した。俺にとってはパクツと一口で食べられるサイズのポテチも、リーナにとっては顔くらいの大きさがあ

抱えるようにポテチを持ったりリーナは、豪快にかぶりついた。
『美味しい！ ちょっと食べにくいのが難点だけど、味は最高よ』
「確かにこれは食いにくいかもしれない……。よし、ちょっと待
つてろ」

俺はまた部屋を出ると、さっきの戸棚から今度はポッキーを出し
た。これなら短く折って食べれるし、大きさも問題ないはず。

部屋に戻って箱を開け、一センチくらいの長さに折って渡した。
ポッキーも気に入ったようで、リーナは何度も『美味しい』と繰り返
し、軽々と一本食べ切った。意外と大食いらしい。

『ねえ、他にはどんなものがあるの？ もっと食べてみたい』
「他にもいろいろあるよ。けど今日は無理だな。あまり食べると母
さんに怒られるし」

現にこうして夕飯前に二つもお菓子をあけてるのがバレたら、母
さんに怒られるだろう。でもまあ、リーナの機嫌も取れたようだし
良かった。って、何で俺がタダメシ食らってるヤツの機嫌なん
か取らなきゃいけないんだ。

食べかけのお菓子を輪ゴムで閉じておくと、勉強机の一番下のひ
きだしに隠しておいた。またリーナの腹が減ったときにもあげられ
るし、自分も食べられるし。

でもずっと家からお菓子をかつぱらってたなら、いずれバレそうだ
な。俺の生活のためにも、早くリーナが光の都に帰ってくれればい
いんだけど……。

「そういえば、昨日の続きだけど。光の都に帰るときがきたら、どんな願いを叶えてくれるの？」

『そっか、そんな話してたわね。うーん……。祐樹くん、「真理子ちゃんと付き合えるようにしてくれ」って言ってたけど、そこまですることはできなくても、きっかけを作ることならできるわよ。あ、何か手を拭けるもの貸してくれる？』

まったく、マイペースなヤツだな。俺はチョコレートまみれの両手を差し出したリーナに、ティツシュを一枚ヒラツとかけてやった。たかがティツシュ一枚なのに、シーツを抱えてるみたいだ。

「で、きっかけって何？」

『告白できるシチュエーションを作るとか』

「どっついう意味？」

もそもそとティツシュで手を拭いたリーナは、ベッドに腰かけた俺の前に飛んできた。

『学校って、なかなか意中の人と二人きりになったりできないじゃない。今まで担当してきた人の中にも多くいたんだけどね。だから妖精がお手伝いして、二人きりになれる時間、それも相手が素敵に見えるようなシチュエーションを作ってあげることがあるの。』

例えば祐樹クンの場合だったら……部活の試合で活躍したあと、真理子ちゃんと二人きりで帰る時間の流れを作るとか。いつもは妖精のタイミング次第で作られる時間も、私たちのように会話ができるなら、祐樹クンの心の準備が整ったときにすぐ時間を作ること

可能だし。まあ、その辺りは臨機応変って感じになるわね』

真理子ちゃんと二人きりになれるのは嬉しいけど……それじゃ結局、何の進展にもならなくね？ 俺は深々と溜め息をついた。

『不満？』

「だってソレ、フラれたら終わりだし」

『もう。男気ないわね。「当たって砕ける」って、人間はよく言うじゃない』

「俺は砕けるのは嫌なの。大体、同じクラスだし。フラれたら気まずいだろ」

いくら二人きりになれたところで、俺が告白してOKなんかもらえるはずない。そんな危険な挑戦をするより、もっと現実になる願いの方がいいに決まってる。

「どうせまだしばらく人間界にいるんだろ？ そのうち考えるよ」

『まあ……そうね。決まったら教えてくれればいいわ』

普段から欲しいものとか願いなんて数えきれないほどあるはずなのに、いざこうして願いが叶うかもしれない場面に直面すると、意外と何も浮かんでこないものなんだなあ……なんて実感する。

「何かないかなあ……」

ポツリと呟いたとき、廊下からパタパタと小さな足音が聞こえた。由佳の足音だ。足音はドアの前で止まり、「開けるよ！」と由佳の声が出た。

「昨日のCD、ありがとう」

「そっぴゃ昨日、由佳にCD貸したんだっけ。俺は立ち上がると、中に入ってきた由佳からCDケースを受け取った。」

「あのさ、由佳。もし願いが一つだけ叶うとしたら、由佳なら何を願うする？」

「思わず訊いたけど、すぐにやめときゃ良かったと後悔した。」

「……お兄ちゃん、昨日から何か変じゃない？」

「明らかな疑いの眼差し。下から見上げられ、俺はひるみかけた。」

「別に、変じゃねーよ」

「そう？」

「普通だつてば」

「ふーん……」

由佳はガキのくせに、妙に感が鋭いところがあるからなあ……。多分、俺が何か隠していることぐらいは気付いていると思う。

「何でもいいだろ。今から宿題するんだから。早く出てけよ」

「分かった分かった。けど、もうすぐご飯だからね」

「そっぴゃ残し、由佳は部屋から出ていった。」

+++++

リーナは俺が家にいるとき、俺の部屋から出ないようにすることを約束した。まず由佳に怪しまれているということ、そして家では

つい素が出る可能性があるから、家族の前でリーナに反応してしま
うかもしれない危険があること。

妖精はトイレや風呂がないらしいから、その点での不便がないの
は良かった。これが人間だったら、隠れて居候なんて絶対に無理だ
からな。

食料は適当にお菓子をストックしておけば事足りるし、ゲームを
口実にすれば部屋までメシを運ぶこともできるし。にしても、秘密
任務にでも就いているような気分だな……。

夕飯を食ってから部屋に戻ると、リーナは宙に浮かんで窓から外
を眺めていた。

「どうしたんだよ」

『何でもない。ちょっと考え事してただけ』

「ふーん」

軽く返事をしながらベッドに転がる。部活で運動してきてないの
に、ちよつと食いすぎたかな。

『あ、またゴロゴロしてる。宿題あるのにいいの？』

「勉強なんて食ってすぐするモンじゃないの」

『そうなの。……じゃあ何かお話でもしようよ。この部屋の見学は
一通りしたし、もう飽きちゃった』

住まわせてやってるのに、二日で飽きたとか抜かしやがって。つ
いか、勝手に部屋の中をいろいろ見たのかよ。

「自分の部屋とはいえ、あまり喋ってもいられないんだけど」
『どして？』

「誰かがドアの前を通ったとき、声が聞こえちゃうだろうし」
『由佳ちゃんに言われたみたいに、電話ってことにすればいいじゃない』

部屋にいる間ずっと電話してるなんて不自然だろ！ とノリツツコミしそうになるのを押さえ、俺は何か話題になるようなことはないかと考えた。うん、俺って何気にいいヤツだな（今頃、俺を担当している光の都の妖精はハツラツしているに違いない）。

「これからはできるだけ小声で話すことにするよ。由佳に怪しまれるしな」

声量を落とすと、リーナは枕元まで飛んできた。

『何か面白い話、ないの？ いろんなこと聞きたい』

「んなムチャ振りされても……」

腹をさすりながら溜め息をつく。

「じゃあ勉強でもする？ んで俺より賢くなって、宿題担当になるってのは？」

『いいわよ』

「えっ？ いいの？」

「ここは「勉強は自分でするものでしょ！」とか言うのがセオリーだろ……」。

『知識を得るって素晴らしいことよ。人間の子供たちは勉強を嫌がる傾向があるそうだけど、光の都ではみんな楽しく学習してるわ。あんな楽しいこと、どうして人間は嫌うのかしら。祐樹くんも全然やる気ないみたいだし』

……何だか調子狂うなあ。

『 って思ったけど、今日はそろそろ寝たいわね』

「は？」

『妖精の睡眠時間は長いのよ？ 平均で十時間くらい』

「長っ。なんか楽そうでいいな、妖精の世界って」

するとリーナは、背を向けてしまった。

『楽なんかじゃないよ。そんな簡単に言わないで』

「あ……そっか、ごめん」

ふと口にしてしまったけど、確かに詳しいことまで知ってるわけじゃないのに軽率だったかな、と反省した。

『うっん、私こそゴメンネ。私も人間界が羨ましいって思うけど、それと同じだね。人間にだってたくさん大変なことあるわけだし』
リーナは振り返ると、ニコツと笑ってみせた。

『それじゃ、私は寝るよ。明日からも部屋の窓が開いたら、学校に行くね』

「……来るのは我慢するとしても、授業中に窓から飛び出すのはやめろよ」

ちょこんと舌を出したリーナは、『おやすみ』とタオルにもぐりこみにいった。そういやタオル、机の上だっけ。……まあ、そうだな。起こすと悪いし、宿題は学校で誰かに見せてもらえばいいか。

俺は身体を起こすと、本棚からマンガを手にした。そしてまたベッドに寝転がる。マンガを読み始めてしばらくすると、廊下から由佳の声がした。

「お兄ちゃん、お風呂だつて！」

「分かった」

声を上げると、マンガを閉じて立ち上がった。リーナはもう寝ているみたいだ。着替えを持って部屋を出て、一階の風呂場に向かう。妖精ってよく寝る生き物みたいだけど、寝付きもいいんだな。なんて思いながら階段を下りている途中だった。

「うわっ！」

残り数段のところまで足を踏み外した俺は、床に尻もちをついてしまった。

「いつて……」

腰を押さえながら、落としてしまった着替えを拾う。音に気付いた母さんが、キッチンから顔を覗かせていた。

「大丈夫？」

「うん、ちよっと転んだだけ」

「あまりにもダラダラしていると受験に『落ちる』わよ、っていうお告げじゃないの？ 私ったら、上手いこと言うわね」

はははっ、と笑う母さん。ちよっとくらいは心配してもいいだろ……。そこでふとリーナの言っていた闇の都のことを思い出した。もしかして宿題やらずに学校に行こうとしたから、闇の都の妖精が俺に罰を与えたとか……？

「……んなワケないよな」

そうだ。こんなことで罰だの何だの言ったらキリがないっつーの。俺は言い聞かせるように、深く頷いた。

+++++

翌日から、ちよくちよくリーナは学校までやってきた。多少は気を遣うことを覚えたのか、俺が友達と話しているときは制服のポケットで休んでいる。

俺の方はというと、最初こそ声が出せずにイライラしてたけど、しばらくすると授業中に暇を潰せて意外といいかもしれないなんて思っていた（授業中ならこっそりノートに文字を書いて会話できるし、リーナと会話してることで時間が過ぎるのが早く感じるし）。

でもそれが半月を超えた頃、このままでいいのかと思う自分もいた。コソコソとリーナを匿う生活には慣れたけど、「そもそも何で俺がそんな生活をしなくちゃいけないんだ？」とか思うわけで……。

リーナは人間界の食事や習慣に興味を示すものの、光の都については最初るとき以来ほとんど語らなかつた。妖精にとって人間は仕事の対象となる存在だから、あまり多くを語れないらしいけど。どうして人間界にいるのかも謎だし、いつ帰るのかも謎のまま。

「はああああ……」

ある日の授業中、返された数学のテストを見て、俺は大きく溜め息をついた。まともに勉強してなかつたせいで、三十二点。こりゃ間違いなく母さんに怒られる。

でも今日はリーナが学校に来てないから、馬鹿にされずに済んだことだけ助かつた。昨日は英語のテスト返却時にリーナがいて、「×ばっかりー！」と机の上で笑い転げていたから。口を出せないのがもどかしくて仕方なかつたんだよな、つたく。

「よっしゃ、勝つたし」

後ろから聞こえた健太の声に振り返る。健太は三十七点のテストを広げてみせた。

「でも珍しいな、祐樹が数学で三十点台なんて」

言われてみれば……。去年からずっと、健太とは定期テストの合計点を競っていた。大抵の教科で健太にあと一步及ばない俺だったけど、数学だけは絶対に負けなかつた。というのも健太は数学が一

番の苦手科目で、逆に俺は一番の得意科目だから。

本来「よっしゃ」「なんて言える点数じゃないけど、健太が喜ぶのも分らないでもない、気もするようないような……」。

テスト返却が終わり、先生がうるさくなった教室を静かにさせる。先生の話そっちのけで、テスト用紙の端っこに、これまで返されたテストの合計点を計算してみた。

あと返ってきてないは歴史のテストだけだけど、この分だと健太に負けそうだ。にしても、前回の定期テストより下がってる。こりゃ成績も下がるだろうな……。受験もあるってのに。

そこでふと、リーナの顔が頭に浮かんだ。そもそもアイツが常に話し相手になってるせいで、うまく勉強に集中してこれなかった気がする。リーナが寝る前までは小声で喋ってばかりだったし、寝た後も何となく気になっちゃうし。

でもなあ……。「妖精と喋ってるせいで勉強時間が減った」なんてこと、先生や親に言えるはずもないしな。バカになったというより、おかしくなったと認識されるに決まってるし。

その日の部活が終わる頃、俺は一足先に切り上げて教室に戻ることにした。部活に来る前、教室に水筒を忘れてきたことを思い出したんだ。

制服に着替えたあと、階段を駆け上がって教室に向かった。けど、上り切った先でバテた。乱れた息を整えながら廊下を歩いていると、ウチの教室から女子の笑い声がした。

「じゃあ健太？」

教室から聞こえてきた名前。健太って……あの健太だよな。ウチのクラスには一人しか健太いないし。俺は立ち止まり、声に耳を傾けた。

「違う違う」

「健太も違うの？　じゃあ……」

この声は真理子ちゃんと志穂（あ、志穂は小学校のときから知ってるヤツで割と仲はいいけど、男勝りで恋愛対象にはならないタイプ）っぽいな。そういえば真理子ちゃん、今日は委員会の仕事で部活には来てなかったっけ。

っーか、この流れはもしや……好きなヤツをはぐらかしながら教えあうアレ？　真理子ちゃんの好きな人が聞けるかも。そう思った瞬間、せつかく落ち着きかけてた心拍がまた上がりだした。

「俊吾とか？」

「うっん」

「他にサッカー部って、誰かいたっけ……」

志穂の声。要するに、真理子ちゃんの好きなヤツはサッカー部ってこと？　何となく期待して次の言葉を待つ。

「あ、祐樹？」

きた！　真理子ちゃん、「うん」って言うて。

「それはないか、真理子は祐樹みたいなタイプのじゃないよね」
またまた志穂の声。おい、ふざけんなっての志穂！

「祐樹クンってさ」

ちよっと間が空いたあと、真理子ちゃんの声が聞こえた。もしかしてもしかすると、やっぱり。

「最近、何かおかしくない？」

……え？

「席、近いでしょ。授業中にノート取りながら、よく一人で笑っているのが見えるんだ」

ドキドキしていた心臓が、ドクンドクンという鈍い音に変わり始めている。

「何それ。明らか変でしょ」

「たまにイライラしてるみたいなきもあるし」

「えー。何かキモい」

「別にそんなつもりで言ったんじゃないけど……」

真理子ちゃんに気味悪がられてる。志穂にバカにされるのはともかく、真理子ちゃんにまでキモいと思われるなんて。

教室に入れるはずもなく、逃げるように廊下を引き返した。昇降口を出てチャリ置き場へ、そこからまっすぐ帰宅。チャリを漕ぎ続ける間、俺はシヨックよりも強い感情を抱いていた。それは怒り。

帰宅すると、リビングから聞こえた由佳の「お帰り」という声を無視して、俺は階段を上がっていった。部屋のドアを荒々しく開け、睨むように中へ入る。

ドアを閉めると、チェストの上のタオルをバサツと広げた。リーナがベッド代わりにしているタオルだ。リーナは学校にこない日の夕方、大抵タオルにくるまっっている。今日もやっぱりそうだった。

タオルから転がったりリーナは、体勢を立て直して俺を見た。

『もう、何するのよ。お昼寝中なのに』

「全部お前のせいだぞ！」

帰ってくる間に溜めこんできた怒りをぶつける。リーナは「ちょっと！」と慌てた。

『そんな大きい声だして大丈夫なの？』

「うるせーよ！ お前が話しかけてくるせいで、真理子ちゃんにキモいって思われたんだぞ」

『キモい？』

「学校でも家でもずーっとくっついてるから、勉強にも集中できないし。だからテストだって酷かったんだ！」

一気に言葉をぶつけると、リーナの顔がクシャツと歪んだ。イライラが抑えられなくなって、バッグを床に投げ捨てる。

「全部お前のせいだ！」

もう一度そう言い捨てる、部屋を飛び出した。

「お兄ちゃん！ 何なの！？」

階段を駆け降りた先で、由佳に声をかけられた。「出かけてくる」と言い、引っかけるようにサンダルに足を入れて外に出た。どこに行く目的があるわけでもなく走り出す。

そうだ。全部アイツのせいなんだ。授業中に話しかけてきたり、部屋でも一緒にマンガを覗きこんで文字を読みたがったり。真理子ちゃんにおかしく思われたのだから、アイツがいたせいだ。アイツが来てから、「普通」じゃなくなっただ。

「クソッ」

赤信号で立ち止まり、石を蹴飛ばす。今はとにかく走っていたい気分だった。俺は向きを変えると、別の方向に走り出した。その瞬間、ものすごいクラクションの音が聞こえた。

「！」
反対側の横断歩道の目前まで、車が迫っていた。バランスを崩す瞬間、「あー、俺ここで死ぬのか」と呑気な考えが浮かんだ気がする。

『ダメっ！』

この声はリーナ？ 俺を追いかけてきたのか？ でも俺、もう死ぬから。最期を看取るのが妖精なんてな……。ほんの一瞬のうちに脳内を駆け巡り、俺は車に撥ねられて。

「うわああ！」

車のドアに身体がのめり込んだと思ったら、運転してたオッサンの身体を突き飛ばし、反対側のドアをブチ破って、横断歩道に抜けた。ワケない！ 俺、今……車をすり抜けた！？ 身体はどこも痛くない。怪我してる様子もない。こんなことって……。

ふと見ると、急停止した車から降りたオッサンが、俺のところに駆け寄ってきていた。オッサンの顔は青ざめていた。

「嘘だろ」

「嘘だろ」

一緒に呟く。俺は撥ねられたと思った、オッサンは撥ねたと思った、ってことだろう。

「あつ、そうだ、とにかく、こっちへ」

あたふたとした様子で、オッサンは俺の背中を押しながら歩道に入った。道行く人たちが立ち止まって状況を見ていたけど、俺が無

事なのを確認すると動き出したみたいだった。

「どこも怪我してないの？」

「よく分かんないけど、怪我はないみたいです」

「ぶつかった感じもなかったの？」

「何も。車とおじさんを突き破った感じはしましたけど」

「……？」

オッサンは不思議そうな顔をしたけど、それは一瞬で安心した顔に変わった。

「とにかく良かった、無事でいてくれて。急に飛び出してくるからおじさんの心臓まで飛び出たぞ」

微妙に落ち着いたのか、オッサンはオヤジギャグ（のつもりだと思っ）を言ってきた。

「急に飛び出すんじゃないぞ。危ないからな」

オッサンは車の方に戻っていった。俺はその姿を見送ると、自分の身に降りかかったことを確認した。

まず信号が赤だったから、反対を渡ろうとした。そのとき曲がってきた車に撥ねられたけど、撥ねられてなかった。いや、あれは間違いない撥ねられたはずだったんだけどなあ。そこで、リーナのことを思い出した。確か死ぬかもって思った直後、リーナの声が聞こえたような……。

軽く辺りを見渡すと、薄暗くなったベンチの上にリーナが横たわっているのが見えた。慌てて駆け寄ってみると、リーナは電池の切れた人形のように固まっていた。

「おい……」
ベンチに向かって声をかけたけど、何の反応もない。俺はベンチの前に座り込んで、リーナの腰辺りをつついてみた。

『うう……』

小さな呻き声。死んでるわけじゃないみたいだ。ひとまず安心する。

『祐樹クン……良かった……』
また反応がなくなった。

「起きろって！ おい！」
手を引つ張つてみても、身体を揺すつてみても、反応がなくなつてしまった。

ヤバいぞ、この状況。リーナもそうだし、俺もだ。さっきから通行人の視線が突き刺さるように痛い。他の人にはリーナの姿が見えないから、俺はベンチに向かつて一人で話しかけてる、かなりヤバいヤツに映っているんだろう。

俺はリーナの身体をそつと両手に包むと、家に向かつて走り出した。恥ずかしさとリーナが死んだのかという不安で、身体が尋常じゃなく熱かった。

家に飛び込むと、玄関に由佳の姿があった。

「お兄ちゃん、どうしたの」

「ああ、由佳……。別に何でもねーよ」

「何でもないことないでしょ」

「何でもねーってば」

逃げるように階段に向かうと、由佳に呼び止められた。

「今日はお父さんが残業で、お母さんはパート先の飲み会だってお腹空いたら、お父さんが帰る前にご飯にしていってメールきたよ。先に食べちゃおう？」

「俺は後でいい。由佳、先に食べてるよ」

顔だけ向けて答えると、由佳はムスツとして「私だっでご飯の時

間くらい待てるもん」といじけた。俺はリーナを早く見てやらなきゃと思いつつ、「じゃ、後で」と言いつつ階段を駆け上がった。

部屋に入ると、リーナをベッドに寝かせた。床に膝をつき、じつと見つめる。相変わらず無反応で、顔はいつもに増して真っ白だった。

どうしよう。死んでるんじゃないよな。いつの間にか、さっきまでの怒りは消えていた。とにかく目を覚ましてくれ。ワケが分からないまま死ぬなんて嫌だ。

『うーん……』

声が出た！ 良かった、ちゃんと生きてる。俺は小声で「リーナ？」と呼びかけた。その瞬間、リーナの目がパチツと開いた。そしてゆっくり身体を起こす。

『祐樹くん……。怪我してないよね？』

「うん。リーナこそ大丈夫かよ。てか、何があったんだ？」

『力を出し過ぎてオーバーヒートしちゃったのよ』

「力って？」

リーナは弱々しい笑みを浮かべた。

『前に話したでしょ？ 光の都の妖精は、妖精の力で人を幸せにするのが仕事って。その力を限界まで一気に放出しちゃったの。オーバーヒートすると身体が動かなくなるって聞いたことあるけど、ホント死んじゃうかと思った』

その言葉は、とても重く感じた。

『祐樹くんが車にぶつかりそうになってるの見て、つい必死になっ

ちやった』

車をすり抜けられたのは、リーナが自分の力を出し切ったからだったんだ。リーナは自分の身を削ってまで、俺を助けてくれた。それなのに俺は。何が何だか分からなくなって、目から涙が落ちた。

『どうしたの？ どうか痛いのか？』

「だって俺、全部リーナのせいにしたのに……」

『ううん、いいの。私のせいで祐樹クンの生活が変わっちゃったのは事実だもん』

「でも……ごめん」

ゴシゴシと服の袖で涙を拭った。ホントは分かっているんだ。テストの点が悪かったのも、真理子ちゃんに変に思われたのも、結局は自分のせいなんだって。リーナのせいにして逃げようとしたのに、八つ当たりもいいトコなのに、それでもリーナは俺を心配してくれた。自分が情けなかった。

『大丈夫だよ。私、ちゃんと生きてるし』

リーナは立ち上がって宙に舞ったけど、すぐにぐったりしてベッドに降りた。

『まだちよつと疲れてるみたい。休んでいいかな？』

その言葉に頷くと、俺はチェストの上のタオルを綺麗に敷き直した。そつとリーナを運び、タオルの中に寝かせる。

『ありがとう』

「うん」

そのとき玄関のドアが開く音がした。父さんが帰ってきたんだろ。メシを温め直しに行かなくちゃ。俺はリーナに「行って」と声をかけると、部屋を出てキッチンに降りた。

俺と由佳、父さんの三人で始まった夕食。父さんはテストの結果が今日も良くなかったことを知ると、グチグチと文句を言い出した。ま、母さんに言われるよりマシだけど。

母さんだと説教に始まり、自分の学生時代の話に脱線し、また説教に戻り、最終的には「小遣いなし宣言」に終わる。今日は先に父さんがグチグチ言うのを聞いたから、最後の「小遣いなし宣言」だけで済むだろう。それが一番イヤなポイントだけどさ……。

部屋に戻ると、リーナは寝ていた。今日はきつと、いつも以上に長く寝ないと辛いだろう。俺は睡眠の邪魔をしないよう、バッグから教科書やノートをそつと取り出した。

そして机に向かうと、テストで間違えた問題や分からなかった問題の復習を始めた。夕飯のあとはダラダラするのが日課だけど、今日は何となく勉強しなくちゃって気持ちになったんだ。

+++++

翌日の学校にリーナは現れなかった。相当な疲れがたまってるんだと思う。朝もよく眠ってたし。それはそうと、返された歴史のテストは予想以上の高得点で、全教科のトータルで健太に勝つことができた。

たった五点の差で……と数学のテストで健太に思ったけど、数点でも勝てば嬉しいな。俺と健太の合計点の差は、超僅差の二点だったんだ。

その日の部活が始まる頃、着替えて部室から出たとき、真理子ちゃんと鉢合わせしてしまった。……一方的に気まずいって、なんかしんどいな。

すれ違いざまにニコツとしてくれた真理子ちゃんだけど、心の中では「こいつ一人で笑ってキモいんだよねー」とか思ってるんだろう。あー、マジで凹む。でもそれは、今後の部活でカッコいいプレイを見せて挽回してやるんだ。

張り切ってシュートを決めまくり、部活を終える。真理子ちゃん、今日はガッツリ俺の雄姿を見てくれただろう。うん、この調子だ。心なしか上達した気もする。

「今日、張り切ってたな」

帰り道チャリを漕ぎながら、健太に言われた。

「まーね。真理子ちゃんにいいトコ見せたいし」

「何それ。なら昔から張り切れよ」

「うるせーな。気持ちの変化ってヤツだよ」

すると健太は「もしかして！」と声を大きくした。

「お前、真理子ちゃんに告る気？」

「んなワケないだろ。俺なんか眼中にも入ってないって」

「分かんないじゃん」

「……分かってるから言ってるんだよ」

健太は不思議そうにしたけど、俺は笑って誤魔化した。

「でも今日の祐樹のプレイ、俺から見てもイケてたと思うよ」

「マジで？ 健太にそんなこと言われる日が来るとは」

健太はおちやらけたヤツだけど、サッカーの技術レベルは高く、入部時からすごいと思ってた。今でもスゲーって思うからこそ、健太の言葉がやたら嬉しかった。

気分良く帰宅すると、夕飯ジャストのタイミングだった。先にメシを済ませ、部屋に戻る。リーナに今日のことを話したかった。昨

日テスト問題を復習したことで、今日はいつもよりちょっとだけ授業が分かりやすく感じたこと。健太にサッカーのプレイを褒められたこと。

何を話そうか考えながら部屋に入ってバッグを置くと、早速チェストの上のタオルをめくってみた。けど、リーナはいなかった。

「おーい。帰ってきたぞー」

机の上、ベッドの中、本棚の隙間、抽斗の中、押し入れ……リーナが一人で入れそうなところを次々と見ていく。でも、リーナの姿はなかった。

「リーナ！」

ちよつと声を大きくしてみる。でも返事はない。

慌ててキッチンに降り、洗い物をしている母さんの背中に声をかけた。

「俺の部屋の窓、開けた？」

「午前中、布団を干すついでに」

「いつ閉めた？」

「夕方だけど……。何？それがどうかしたの？」

「あ、いや、別に……」

適当に返事をしながら、考えを巡らせた。リーナは窓が開いている間に、起きて部屋を出たんだろう。でも俺のところには来なかった。じゃあどこに行ったんだ？こんなことは今まで一度もなかった。

「何よ、もう。さっさと宿題やりなさい。あるんでしょ？」

「分かってるよ」

ゆつくり階段を上がり、部屋に戻る。やっぱり昨日のことで俺に嫌気がさして、家出しちゃったのか？ 家出という表現が正しいか分かんないけど……。もしかして、光の都に帰ったとか？ でも勝手に帰るか？

「帰るときは俺の願い、何か一つ叶えてくれるんじゃないか
よ……」

窓に向かって呟くと、何だか急に胸が苦しくなった。俺の部屋に居候しておきながら、お礼もなしに消えるなんて。いくら俺が迷惑かけたからって、勝手すぎるだろ。

その夜、俺は窓を少しだけ開けて寝ることにした。もしかしたら夜中、リーナが戻ってくるかもしれないと思ったんだ。でも朝になっても、リーナは戻ってこなかった。制服に着替えながら、チエストの上で綺麗にたたまれているタオルを見て溜め息をつく。

授業中も、ずっと窓の外を眺めて過ごした。マジでどこに行ったんだよ、アイツ。勝手に消えるなよ。せめて何か一言くらい言ってから消えるよ。ワケ分かんねーだろ。……何でだよ。

「おい祐樹、どうしたんだよ」

部活の休憩中にボーっと座っていると、健太がボールを片手に歩いてきた。

「昨日はいい感じだったのに、今日いきなりボロボロじゃねーか」

「……何か気分が乗らなくてさ」

「風邪でも引いたか？」

「違うよ」

健太からボールを奪うと、床に落とした。小さく弾むのを足で押さえ、壁に向かって蹴りつける。

「機嫌が悪いだけか」

「そんなんじゃないって」

蹴ったボールを拾いに行こうとしたとき、近くを通った真理子ちゃんが先に拾ってくれた。

「力、入りすぎちゃってるよ?」

ニコニコしながら、真理子ちゃんはボールを渡してくれた。

「そつだよね、ごめん」

「昨日はすごく良かったし、今日もあと少し頑張って」

「……見ててくれてたんだ」

「そりゃ、練習の記録を取るのもマネージャーの仕事だから」

変な期待をした自分が恥ずかしかった。別に俺だけ見てたんじゃなくて、部員みんなを見てるに決まってるよな。

「もうすぐ休憩、終わるからね」

真理子ちゃんはコートの方に向かって駆けていった。その様子を見送ると、後ろから近付いてきた健太がニヤつとした。

「機嫌、直ったか？」

「うっせーよ」

照れ隠しをしつつ、俺たちもコートへと走り出した。

部活が終わると、俺は急いで片付けて学校を出た。チャリを漕ぎまくる。リーナが帰っているかもしれないと思いながら、車に撥ねられそうになった交差点の近くに差し掛かったときだった。

「!」

急にチャリが傾いた。何とか転びそうになるのを堪え、歩道の脇に着地する。

「んだよ、ったく」

舌打ちしながらチャリを見ると、前輪がパンクしていた。

「マジかよ……」

最悪すぎる。何で急いできるときに限ってこんなことになるんだよ。

「ぶざけんなつての」

小声で悪態をつきながらも、チャリを引いて歩き出した。辺りは薄暗く、街灯が妙に明るく見える。この場所で、リーナは俺を助けてくれたんだよな。アイツ、帰ってるかな……。

横断歩道を渡りながら、もしかしたらこの場所でパンクしたのは必然だったのかな、なんて思った。この場所をゆっくり歩きながら、リーナを連れて帰ったあとのことを思い出したんだ。

あのとき俺は謝ったものの、一度も「ありがとう」と口にしなかった。リーナが帰ってたら、ちゃんとお礼を言おう。ホントはすぐ伝えなきゃいけないかった言葉だと思っし。

信号が点滅し始めるのを見て、少し足を速める。部活後の身体には、チャリ+カゴに乗せたバッグの重みはずっしりきた。横断歩道が終わった先で立ち止まり、「ふう」と息を吐く。そしてもう一度ハンドルを握る手に力を込め、歩き出した。とき、ありえない光景が目に入った。

街灯の明かりの下で、宙に浮いている人形が二体。瞬時に目をそらした。……うん、疲れてるんだな、俺。でもやっぱり気になって、そっと目を戻す。と、やっぱりそこには人形が二体。

「嘘だろ！」

思わず声を上げた瞬間、横を通り過ぎたオバサンがビクツツとして俺を見た。

「あ、いや、何でもないんです」

あはは、と白々しい笑いで誤魔化す。オバサンはブツブツ独り言を言いながらも、どっかに行ってくれた。良かった……。

俺は恐る恐る、二体の人形に歩み寄った。スーツっぽい感じの黒服を着た、金髪と銀髪の男。これって、これって、やっぱり。

「あの、君たちは……」

二体に向かって声をかけると、二つの顔が同時に俺を見た。その顔は、明らかに動揺していた。金髪が俺を差す。

『お前、我々が見えるのか！？』

いつか聞いたぞ、そんなセリフ！

『こんなことがありえるのか!』
それはこっちのセリフだったの!

いろいろ気になることはあるけど、とにかくここじゃマズい。俺は近くに小さい公園があることを思い出し、そこに二人を連れていくことにした。困惑する二人を鷲掴みにして、チャリのカゴに押し込む。

『何するんだ!』

『我々をどうする気だ!』

カゴの中で騒いでる男たち(よく見ると顔はオッサンだった)に向かって、「静かにして」と小声で言った。

「事情は後で話しますから」

そう付け加えると、男たちは顔を見合わせて黙った。取りあえず、俺の言うことを聞いてくれたみたいだ。

駆け足でチャリを引き、公園のベンチに座った。ここはベンチ(脚が付いてるだけで、ただの細長い石の板)とブランコ(ちっちゃい子向けで、俺じゃ尻がはまらない)しかない、公園にしてはシヨボすぎる広場みたいな場所だった。しかもめっちゃくちゃ狭いし。夕方以降、人がいるのを見たことがないってくらい廃れてる。

人が通ったときに備え、俺は携帯を耳に当てた。電話してるフリをしながら男たちと喋ってれば、一人でも怪しまれることはないだろう。普通ならありえない状態も、リーナのことがあるし、最初ほどの動揺はない。それでもやっぱり動揺はあるけどさ……。

男たちはカゴから出ると、俺の前に浮いた。

『どこに電話してるんだ』

金髪の問いに、俺は「電話してるフリだけです」と答えておいた。

「それで……あなたたち、『光の都』の妖精？」

『何故、光の都のことを知っている！』

『我が都に人間界の浸食が迫っているとでもいうのか！』

話が大袈裟になっちゃってるし。ワーワーと騒いでる二人に、俺は「落ち着けてば！」と声を荒げた。

「他の人間に、あなたたちの姿は見えないですよ。俺が特別なだけみたいで」

『何だ、お前だけか……』

銀髪がホツとする横で、金髪は難しい顔をした。

『それにしたって、前代未聞の重大事件だぞ。我々の姿が見える人間が存在するなんて。これは早急に調査が必要だ』

『確かにそうだな。戻った際は報告をせねば』

この二人……よく分かんないけど偉い人なのか？ リーナと何か関係のある妖精かと思っただけど、別にそういうわけじゃないのか？

「俺は祐樹。高校三年です。あなたたちは？」

『我々は光の都より参った、ポップーンという組織の者だ』

「そのポップコーンというのは、何の組織なんですか？」

『ポップコーンじゃない！ ポップーンだ』

「あ、すみません。でもビシツとキメた服装のオジサン二人が、ポップコーンみたいな名前って……」

不機嫌そうな二人を前に笑っていると、背後から髪の毛を引っ張られた。慌てて振り返ると、そこにはリーナがいた。

「あ、リーナ！」

『あれ、電話中じゃなかったの？ 声出して大丈夫？』
二人の存在を忘れ、俺はリーナの方に身体を向けた。

「お前、マジどこ行ってたんだよ！」

声をかけたけど、リーナの視線は俺に向けられていなかった。

『……どうして』

リーナが呟く。後ろに顔を戻すと、二人の男が怒りに満ちた顔をしていた。

『見つけたぞ、リーナ・ライル！』

俺はベンチを跨ぐように座ると、左右の妖精を交互に見た。

「何だよ、この状況」

何を言っただいかわからないけど、何となくリーナがヤバい状況にいる気がする。それだけは読み取れた。

『この人間に何をしたんだ！ 貴様が妖精の力を使って、この人間に姿を見せたんだろう！』

『違うわ。私だって最初は、何が何だかわからなかったもの！』

睨み合うリーナたちに、俺は口を挟んだ。

「そうです、リーナは何も悪くないですよ。何故か勝手に、リーナの姿が見えちゃっただけで」

『何も悪くないだと？ コイツは指名手配されてるんだぞ！
金髪から発せられた言葉に、俺は耳を疑った。』

「指名……手配？」

目を向けると、リーナは俯いていた。

『だが貴様の逃亡生活もここまでだ。大人しく我々に従い、刑を受けるんだな』

男たちがリーナに近付こうとしたのを、俺は咄嗟に遮った。

「待てよ！ リーナが何をしたっていうんだ？ それに刑って……リーナをどうするつもりだよ！」

『……分かった、教えてやろう。この女の犯した罪をな』

金髪の言葉に頷いた銀髪は、リーナを睨みつけるように解説し始めた。

『光の都の妖精は、ある特定の人間を幸せにするという役割が与えられている。それは絶対的な存在理由でもあるのだが、リーナ＝ライルはそれに反したのだ。自分が幸せにすべき人間を放棄し、逃亡した。』

これは光の都に対する最大の裏切りで、極刑に値する犯罪。リーナ＝ライルは身柄を確保し次第、死刑ということになっている』

次々と発せられる言葉に、俺の頭は熱を帯びていった。

「死刑って……何でそうなるんだよ！」

『騒ぐな。これは人間には関係のない話だ』

「黙っていられるかよ！ リーナも何とか言ってみてやれよ！」

俯いていたリーナは、いつの間にか顔を上げていた。その表情は、

今までに見たことのないような寂しそうなものだった。

「仕方ないの、祐樹くん。私が光の都に対する最大の裏切りをしたのは事実だもん」

「そんな……」

リーナが死刑になるなんて。そんなの絶対に嫌だ。

「……でも、よく私を見つけたわね。人間界なら、絶対に見つからないと思った」

金髪は「確かに」と頷いた。

「我々ポップーンが全力を出して捜査に踏み切ったのにも関わらず、ここまで発見が遅れてしまった。人間界は妖精界の数千倍、しかも莫大な自然まで有している。闇雲に探したところで、発見は九十五パーセント不可能とされていた」

金髪の言葉に、銀髪も頷いて続けた。

「だが先日、人間界で巨大な妖精の力をキャッチした。それが貴様のものであると判断し、我々が力をキャッチした付近に派遣されたのだ」

男たちの話を聞いて、俺はハツとした。巨大な妖精の力、そしてあの交差点。俺を事故から守ろうとしたときに発した力が、リーナの身体の不調だけでなく、リーナの立場まで危うくしてしまったんだ。俺が責めたりしなければ、リーナは俺の部屋でずっと安全に暮らしていられたかもしれないのに……。

『それにしても何故だ？ 貴様の住むエリア長に訊いたところ、この百年ほど、規律違反さえ一度も起こしていないと言っていた。そんな貴様が何故、光の都にて最大の罪など？』

「ちよつと待てよ」

慌てて話を止める。

「百年ほどつて……リーナ、お前いくつだよ」

『百プラス三歳だけど？』

マジかよ。見た目は俺と同世代くらいだったのに。てかリーナで百三歳なら、このオッサンフェイスの二人は一体いくつだよ……。

『祐樹とやら、邪魔をするな。我々は重大な話をしているのだ』
金髪にキリツと睨まれ、「すみません」と軽く頭を下げた。

『最後に聞いてやろう。貴様が裏切りをした理由を』
銀髪が催促すると、リーナはキュツと胸を押さえた。
『分かつてるわよ、私のワガママだって……』
苦しそうに声を出したリーナは、俯きがちに話し始めた。

『前に担当していた人間が死んで、新しく生まれた命を担当し始めてから三十年。彼には素敵な奥さんと子供ができた。』

私は彼の幸せのお手伝いをしてきて、彼や彼の家族も幸せそうだった。でも徐々に、彼はそれを自分で壊し始めた。ある日 彼は、自分の子供を包丁で刺した。

大量の血を流して死んだ子供を見て、奥さんは絶叫していた。そんな奥さんも、彼は包丁で刺したのよ。彼女は死ぬまでずっと、涙を流しながら子供の名前を繰り返して呼んでいた。……そんな彼女と子供の遺体を、彼は山に捨てた』

……酷すぎるだろ。一つ一つの言葉が重く、心臓が押し潰されるんじゃないかってくらい痛くなった。リーナも同じなのか、目に涙を浮かべている。

『事件が発覚すると、彼は警察に嘘ばかりついていた。犯人は彼女なのに、嘘泣きしてるのに、警察は難しい言葉を並べてばかり。逮捕せずに帰っていった……。彼は大切な奥さんと子供を、自分の都合で殺したのよ！ そんな人間に、どうして幸せを運ばなくちゃいけないの！？』

リーナの叫び声が心に響いた。でも、金髪と銀髪は平然としていた。

『何を言ってるんだ。どんな事情があれど、担当の人間には幸せを運ばなければならぬ。それが光の都の妖精の使命だろう』

金髪が偉そうに言うと、銀髪も同意した。

『そうだ。犯罪者であろうと人間は人間。例えどんなに小さいものでも、幸せを運ばれる権利は全員にある。それを我々が放棄してどうするんだ』

途端、リーナは『分かってるわよ！』と叫んだ。

「それが妖精の使命だつてことも、幸せになる権利を平等に与えなくちゃいけないのも、ちゃんと分かっている。

……彼が人殺しをしたことで、私の力は今までにないくらい弱まった。ほんの微かな力しか残ってなくて、それを彼に注がなくなっちゃいけなかったことも理解してる。でも 死ぬ間に子供を呼び続ける彼女の顔が、頭から離れなかった」

リーナの目から涙が落ちる。気が付くと、俺の目にも涙が浮かんでいた。でも、男たちは冷静な顔をしていた。

「とんだ言い訳だな。我々は我々の使命を果たすために存在している。それを果たさないお前に残された道は死刑だけだ」

男たちは俺の身体を回り込み、泣いているリーナを両サイドから掴んだ。

「 やめろっ！」

叫んだ俺は、男たちをリーナから払い落した。小さな男たちの身体はベンチに叩きつけられた。

「ぐっ……」

「何をする、人間！」

打ちつけた身体をさすっている男たちを見下ろしながら、俺はリーナを優しく包み込んだ。

「リーナは俺の家族みたいなモンなんだ。勝手に連れていかせるか！」

『犯罪者を庇うなど』

「リーナは犯罪者じゃない！」

胸に抱えたリーナは、心配そうに俺を見ていた。

「あんたらの世界じゃ犯罪かもしれないけどな、俺はリーナが間違ってるなんて思わない」

『……使命を放棄した妖精を庇う重み、お前も思い知るべきだ』

金髪がそう口にした瞬間、急に手に力が入らなくなった。耳に当たっていた携帯が地面に転がり、リーナを抱いていた腕は垂れ、身体がいうことをきかない。

『祐樹クン！』

腕から離れたリーナが、ベンチの上で脱力している俺の腕をさすった。

『祐樹クンに何をしたの！？』

『ちよつとの間、身体のを抜いただけだ。お前を連れて帰る頃には動けるようになる』

金髪が喋っている間に、銀髪はリーナの腕を掴んだ。

『終わりだ、リーナ＝ライル』

『……分かってる。でも今すぐ、祐樹クンを戻してあげて』

『ダメだ。さつきみたいに暴走されては、こちらの身が危険になる』

身体が自由が利かない中、俺はリーナの名を呼んだ。

「俺を助けたときみたいに、こいつらをどうにかするんだ！ 苦しいかもしれないけど、あとで俺がずっと看病してやるから！」

銀髪の反対側からリーナを押さえた金髪が、急に笑い出した。

『無理だ。こいつはポップーンと違って平民。例えオーバーヒートするほどの力を出したとしても、我々には敵わん』

「うるせー！ カッコつけてんじゃねーよ、クソジジイ！」

一瞬、金髪の顔に苛立ちのようなものが浮かぶ。でもすぐにキリッとした顔に戻った。

『いくら我々を愚弄しようとして、リーナ＝ライルに与えられた運命が変わることはない。諦めるんだな』

金髪と銀髪がリーナを引っ張り、俺の頭を越えていこうとした。

「ふざけんじゃねーよ！」

自分でもビツクリするくらいの大声に、三人揃って振り返った。

「俺を担当してる妖精、いるんだろ？ そいつ、何やってんだよ。こんなに苦しんでるのに。俺には幸せを与えてくれないのかよ！」

『光の都の妖精は便利屋じゃないのだ。勘違いするな』
「クソッ……」

銀髪という言葉に、俺は悪態をついた。

『光の都の妖精と闇の都の妖精、今どちらが活発に活動しているか……それは今までお前がどう過ごしてきたかで決まる。お前が今を不幸で迎えるというなら、それが妖精界全てからの答えなのだ』

今まで　ふざけて怒られたり、授業を真面目に聞かなかつたり、宿題をやらずにマンガばかり読んでたり、リーナに八つ当たりしたり、俺は闇の都の妖精を元氣付けるようなことばかりしていたのかも知れない。

でもリーナに助けられて、自分のダメだったところも反省して、ちゃんと頑張ろうとしてたじゃないか。それじゃダメなのかよ。リーナが光の都にとっては裏切り者でも、俺にとっては大切な存在なんだ。助けたいって思っちゃいけないのかよ。

『ありがとう、祐樹くん』

リーナは男たちに掴まれながら、俺に向かって微笑んでくれた。

『祐樹クンと一緒に過ごせて楽しかった』

「そんな……そんな、これで終わりみたいなこと言うなよ！」

『いいんだ。死ぬまで一人で逃げ続けてるより、ずっと幸せな時間を過ごせたと思うから』

「嫌だ！」

カッコ悪いとか、誰かが通りかかったらどうしようとか、そんなことを考えている余裕はなかった。俺の顔は涙でぐちゃぐちゃに濡れていた。

「お前らは今この瞬間、俺を不幸にしようとしてるじゃねーかよ！目の前にいる人間の身体を自由を奪って、大切なものを取り上げて、何が『人を幸せにする』だ！笑わせんな！」

滲んだ視界に浮かぶ男たちを睨みつける。リーナは真ん中で、泣きそうな目をしていた。

『我々は「正義」だ。闇の都の妖精みたいに言うのはやめたまえ』

「違う！俺にとつては、お前らは『悪魔』だ！」

『悪魔だと？』

金髪が眉間に皺を寄せた。

「お前らに『人を幸せにする存在』なんて名乗る資格ない！」

『祐樹クン……』

そうリーナが呟いた瞬間だった。急に身体が動くようになった。変な術か何かかけられてたのが解けたみたいだ。

『もう動けるようになったのか！？』

『あれは一時間に一度しか使えない力だ。他に動きを止める手を…』

…！」
男たちが困惑している間に立ち上がり、俺は二人まとめて両手に
掴んだ。

「放せ！」

「リーナの死刑をやめる。じゃないと、このまま握り潰すぞ」
ギョツと両手に力を込めると、男たちは苦しそうに唸った。

「どつちが悪魔だ……」

「闇の妖精が活発になるうが、そんなの知るか。今リーナを救えな
かったら、俺は一生後悔する」

言いながら、俺は心の中で祈った。俺を幸せにする担当の妖精。
今この状況を見ているなら、願いをきいてくれ。これから変わるう
としての俺の気持ちで、リーナを救ってくれよ。代わりにするには
小さすぎる頑張りかもしれないけど、一生かかっても返していくか
ら。いろんなこと頑張っていくから。

『頼む、このままじゃ潰れてしまっ……』

『さすがのような目をする銀髪。』

「リーナの死刑をやめるまでは絶対に放さない」

『クソ……。分かった、分かったから話し合おう』

金髪もさすがに慌てている。俺は握る力を弱めた。

「他にも犯罪に対する刑はあるんだろ？ 死刑以外の刑に切り替えるんだ」

『だが、リーナ＝ライルは最大の裏切りを』

『やっぱりギユツと握り締める。』

『ぐう……。分かった、真面目に軽減するから。やめてくれ』

「で、どうするんだ？」

もう一度、力を弱めてやった。

『光の都にとって、このように人間と接触するというのは前代未聞のこと。そのデータは大変貴重なものとなる。リーナ＝ライルが人間界で過ごしてきた間の情報を、全て光の都に提供するという形を取ろう』

光の都の偉い人に、リーナの経験を教えろってこと？ 尋ねると、金髪は頷いた。つまりそれって……死刑どころか、刑そのものを免れたってことじゃん。

『リーナ＝ライルの犯した罪は重い。だが今後の光の都にとって、大きな影響を及ぼすかもしれない情報を得たのも事実。それに免じ

て、今回だけは「人間界への逃亡」ではなく「人間界への調査」という名目にしてやる。

我々は光の都でエリートと呼ばれるポップーン所属であり、その権力は甚大なもの、さらに全員が大きな信念を持って行動している。だがその前に、我々も光の都の一員だ。人間に「悪魔」などと呼ばれては、我々のプライドが許さんからな』

やった……。俺の願いが通じた……。思わず「よっしゃ！」と声が出た。リーナを引っ張り、ギュッと抱き締める。

「ありがとう、ポップコーンオジサン」

「……人間の高校生というのは、こんなにも記憶力の弱い生き物だったのか」

呆れている金髪に向かって、俺は「冗談だって」と笑った。

「というわけだ。任務も終わったし、リーナ＝ライルを連れて今すぐ光の都に戻るよ」

銀髪という言葉に、俺は「は？」と顔を上げた。

「本来、人間界に妖精が降りるのはタブーとされている。すぐに帰還し、リーナ＝ライルには光の都の人間界研究チームのところへ向かってもらうよ」

「じゃあリーナはもう……」

「二度と、お前の前に現れることはない。当然、我々もだ」

手を放すと、リーナは俺の前に浮いた。

「祐樹クンのおかげで、もう一度、光の都の妖精として使命を果たすチャンスをもたらえたよ。離れ離れになるのは寂しいけど……。妖

精としての使命についていろいろ考えながら、これからまた頑張ってみる』

ちよっとだけ悲しそうに、リーナは微笑んだ。

「研究だか何だかが終わったら、また戻って来ればいいじゃないか」
『ダメよ、もう……。こうして赦されたことが、どんなに特別なことか。とてもじゃないけど、これ以上を望むなんてできないわ』

リーナと会えなくなる。いずれはそうなるって分かってたのに、あまりに突然すぎて気持ちが追いつかなかった。

『さ、もういいだろう。リーナ＝ライル、光の都へ戻るぞ』
『待ってください』

リーナは男たちに身体を向けた。

『祐樹クンにお礼を言いたいの。私に人間界の知識をくれたのも彼だから。もう少し、彼と話をさせて』

男たちは顔を見合わせると、『分かった』と答えた。

『だが逃げるのを防止するために、地点発信されるようにしておく』
金髪はリーナの顔に手をかざした。小さな光がリーナの頭に吸い込まれていく。よく分からないけど、発信器みたいな役割をするんだろう。

『では、我々は先に戻っているとしよう』

男たちは空に向かって上がっていくと、途中で消えてしまった。

俺は地面に落ちた携帯を拾うと、土を軽く払った。別に誰に見られても、変なヤツだって思われてもいいや。携帯をポケットにしまうと、涙で濡れた顔を拭いた。

「俺、光の都の妖精を脅しちゃったんだよな。きっと今頃、闇の都の妖精が元気になってるよ」

『ごめんね、私のために……』

「いいんだ。俺は俺の正しいって思うことしただけだし」
ベンチに腰掛けると、リーナは俺の膝の上に立った。

「それよりリーナ、どこに行ってたんだよ」

『真理子ちゃんの傍に付き添ってたの』

え？ 何でそんなこと……。

『祐樹クン、真理子ちゃんに何か言われたって言ってたでしょ。祐樹クンに対する誤解を、何とかして解いてあげられないかなと思つて……』

俺が怒鳴ったこと、気にしてたんだ。

『勝手にいなくなつたら心配かけるかなとも思つたけど、そういうことは早くやつた方がいいと思つて。でもね、真理子ちゃんは』
『気にするなつて』

言葉を遮ると、指でそつとリーナの頭を撫でた。

「ちゃんと自分で挽回しなくちゃ。いろんなことを頑張つてくつて、さつき誓つたんだ」

『……そっか』

微笑むリーナを見たら、急に寂しくなつてきた。お別れなんて信じたくなかった。

「ホントに、もう人間界には来ないの？」

『さつきの通り、私は命を救つてもらつた立場の裏切り者。今後は多分、何十年も監視されたままだと思つ』

「マジかよ……」

『何十年って言つても、人間にとつての数年と大差ないよ。だから平気。でもそういうわけだから、もう祐樹クンとは会えない』

リーナの口から直接言われると、もう本当に最後なんだという実感が湧いてきた。終わりつて、案外あつけないモンなんだ……。。

『お願い、何にする？』

「何が？」

『祐樹クンの元を去るとき、何か一つ願いをきいてあげると言っただでしょ。私もずっと祐樹クンにお世話になり続けるつもりもなかったし、ちよっと……ううん、大分それが早まっただけ』

さつきと違つて、リーナは弱々しい笑みを浮かべていた。

「それって、妖精の力を使うんだろ？」

『もちろん』

「じゃあいい。リーナはもう、十分すぎるくらい幸せをくれたから」

俺は制服の一番下のボタンをちぎると、リーナに渡した。小さなボタンでも、リーナにとっては抱え込むくらい大きい。

「これ、光の都に持ってってよ」

ボタンを受け取ったリーナは、不思議そうな顔をした。

「いつも俺の制服で休んでただろ？ その思い出って感じで」

『そっか、分かった。ありがとう』

リーナはギュッとボタンを抱き締めている。

「それから 車に撥ねられそうになったとき、助けてくれてありがとう。あのとき俺、それが言えなくて」

『いいのよ、そんなの。むしろ私の方こそありがとう。祐樹クンがポップーンに啖呵きってるトコ、カッコよかったよ』

カッコいいなんて言われると照れるじゃん。ニヤニヤしないよう、キリッとした顔を作っておいた。

「あんなの啖呵っていつようなモンじゃないよ。つーか、ポップーンって何なの？」

『人間界でいう警察のようなものよ。妖精の力も半端なく強いし、光の都では神聖視している妖精も多いわ』

そんなヤツを怒鳴りつけたのか、俺は……。きつとしばらく、相当な不幸が待ってるに違いない。でもリーナを救えたんだから。それでいいと思える。

『私も何か、思い出の品を渡せたらいいけど……』

そうは言うものの、リーナは人間界に来たときから手ぶらだし、何も持ち物なんてなかった。ワンピースにもボタンとか装飾品は付いてないし。

そんなことを考えてるうちに、ポケットの携帯が震えだした。出してみると、母さんからのメールだった。いつもならもう帰ってる時間だし、学校帰りにどこかに寄るとも伝えてないから、心配のメールだと思う。

……そこで俺は思いついた。リーナは人間には見えないし触れることができないけど、お菓子を食べることも物に触れることもできる。それなら。

「ただいま」

リビングに顔を出すと、母さんが溜め息をついた。

「遅かったじゃない。ご飯の支度してるんだから、ちゃんと連絡しなさいよ」

母さんが立ち上がり、メシの準備をしにキッチンへ向かう。俺は「ごめん」と言うと、バッグを下ろして顔を洗いに行った。涙のせいで、目元がカピカピしていた。

「お兄ちゃん、ずるいよー」

後ろから由佳が顔を覗かせた。

「また遅くまで遊んできてさ。私はすぐ早く帰って来いって怒られるのに」

頬を膨らませている由佳に呆れつつ、「お前はまだ小学生だと突っ込んだ。

「私だつてもっと遊びたいもん」

「っーか、遊んできたわけじゃないって」

タオルで顔を拭くと、文句ばかり言う由佳を適当にあしらいながらキッチンに戻り、サッとメシを済ませた。バッグを掴み、部屋にこもる。

チェストの上のタオルも、机の中に隠してるお菓子のストックも、もう必要なくなってしまうた。リーナは二度と、この場所には戻らないから。でも片付けるのが惜しかった。

取りあえずリーナのいた痕跡はそのままにしておくとして、俺は携帯を持って由佳の部屋に行った。

「ちよつとパソコン使わせてくれ」

「いいよ」

由佳は自分専用のパソコンを持っている。誕生日にダダをこねまくって買ってもらったもの（ただし必要なときは家族全員に快く貸すこと、という条件で）だ。由佳はその条件をきちんと守っている。

俺は携帯のデータフォルダが保存されているカードを、パソコンに接続した。空のCD-Rを出し、データを焼く準備を整える。

「ちよつと、お兄ちゃん」

後ろから由佳がパソコンを覗きこんできた。

「その写真、一枚だけCD-Rに保存するの？」

「そうだよ」

「ええええ……」

不審そうな声を出す由佳。確かに不審がられても仕方ないかもしれない。

「一人でピースしてる写真なんか、何のために焼くの？ お兄ちゃん、ナルシストってやつなの？」

由佳の目にも、他の誰の目にも、そう写ってるように見えるだろう。でも違つう。

「一人じゃねーよ」

俺の目には、間違いなく二人の笑顔が映っていた。俺だけに見え

る、世界にたった一枚だけの特別な写真。リーナと一緒に過ごした時間は確かに存在したんだって実感させてくれる、大切な証なんだ。

(了)

1 (後書き)

お付き合いいただいた皆さま、ありがとうございました。
活動報告にて本作の裏話的なものを載せるので、よろしければご覧
ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1040v/>

ふたりピース

2011年9月10日17時32分発行